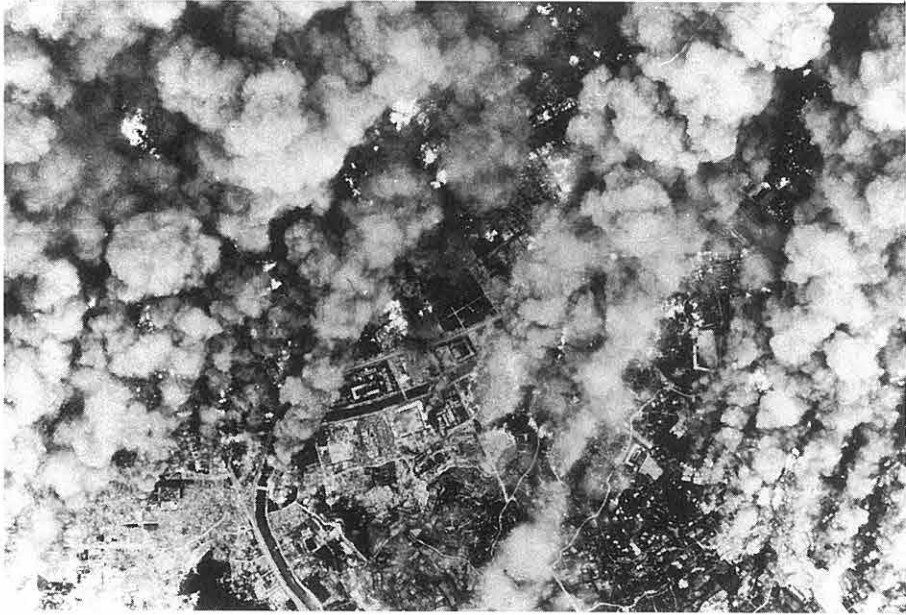


第二部

国内の様子

空 襲



横浜空襲（昭和20年5月29日）

〈提供 毎日新聞社〉

空爆!! 火焰の表参道

●天沼一丁目

浅倉 勝義

(大正八年生まれ)

昭和二〇年五月二四日の昼ごろ、毎日の定期便のように、今日も敵機襲来の空襲警報が鳴り響いていた。この毎日の警報にも慣れて、また来たナ…位の気持ちになっていた昨今でもあった。

去る三月一〇日の下町地区の大空襲による被害についても、報道ニュースにより被災者多数、一面の焼野原という程度で、その実状を知る余裕もないほど、雑事に追いまくられていた新設部隊の軍務であった。この日も大森、蒲田方面なのか、遙か遠くに、焼夷弾攻撃によると思われる火災、炎上の様子が望見できたのは、ここ麻布の東洋英和校附近の高台からであった。この日はあいにく、南からの強風もあり第二波、第三波と大編隊の空襲により、東京の心臓部と思われる山手地区が一夜にして全く灰塵、廃墟と化してしまつたとは!!

もちろん、帝都防衛の各隊特に空軍の戦闘機、地上からの高射砲隊、必死の攻防がこのB29の編隊に向かって繰りかえされた。特攻機が単機で、この編隊に向かって突っこんで行

く。見上げる多くの人たちが祈る気持ちで、これを追う。無念!! 敵機からの銃撃によるものか突然火を吹いて、キリミ状態で落下して行くではないか。高射砲弾も一万メートル位の高度で飛ぶ敵機まで届かず、炸裂するその弾幕は遙か下。数次に及ぶ執拗なまでの攻撃により、ここ青山一丁目にある東京防衛軍司令部の木造建物も夕方には炎上倒壊した。

ヒューヒューザーザーと猛烈な俄雨でも降って来たかのような音の焼夷弾に追いまくられながら、近くのタコ壺に飛び込み、一時避難する。本部内でも負傷者が出た。出血の甚しい者も出たので急遽駒場の陸軍病院から軍医の派遣を要請して来るよう命を受け、側車付のオートバイを兵に運転してもらい飛び出した。

大宮御所の土堀に沿う青山通りは、赤坂方面から避難する人が外苑に向かって走る走る。バイクの私たちもその煙と火焰が渦ず巻く中に突込み、渋谷方面に走る、といつても道路一面、そこかしこに路面電車の架線、両舗道の電柱の倒壊による電線などが、無数縦横に垂れ下っている薄暮の道。この

予想もしない障害物を運転している兵は巧みに通る。垂れ下った電線に首つりにならぬよう避けて走るのが精一杯。明治神宮表参道入口の十字路までたどり着いたのがやつとの事。

ここでは渋谷方面から、あの坂道を地を這うようにして火焰が渦を巻き、すさまじい音とともに吹き上げてくる。この火勢の中、たくさんの住民が明治神宮こそ最良の避難場所と判断して、南青山方面からも逃げてくる。だがここがまた神宮方面に向かって、右側に建ち並ぶ同潤会アパート群に、火勢がぶつかり南風にあおられ、猛烈な渦巻き状態となっていた。逃げ場を立ちふさがれて進退きわまっていたのであろう。

その時軍服姿の私たちを見つけ、アツと思う間にスッカリ囲まれてしまった。一生懸命、抜け道を探している事を説明しても、この修羅場の中ではなかなか通じない。上司からの命令もあるが、この現況では全く無理と判断して、この人たちとこの場から逃げ出す事に決め、まず側車を櫂の目印のある所に捨て、「今から青山墓地方面に逃げるから、ついて来いよ」と、どなりながら、ここまで来た道を今度は逆に走った、走った。夢中で走った。

表参道附近では渦ず巻く煙と火焰で、全く見通しが困難であったが、ここ外苑入口道附近の建物はすでに火勢も衰えていた。兵を本部まで伝令に走らせるとともに、数人の人たちに青山墓地方面を教え、皆と別れた。何時ごろになつていたのか覚えていない。緊張から安堵したのか、疲れ果てた、目のどろが猛烈に痛む。女子学習院の校舎も焼け、その炎は銀杏並木の方に煽られくる。

絵画館前の広場には僅かばかりの荷物を背にくくりつけ、防災頭巾をつけた人で溢れていた。丸い噴水池に水が溜っていた。目が痛く堪えられないので、持っていた手拭で目を冷めているうちに、池の壁に寄りそったまま寝こんでしまった。どの位時間が経過したのか、目が醒めた時、そばに小学校の低学年の男の子が寄り添うようにねこんでいた。この混乱に親と別れ、ここまで逃げて来たのであろう。引き寄せ、そのまま寝てしまった。

夜明けごろまでこの池のそばにいた。明るくなり、避難して来た人たちでこの広場も埋まっていた。子供は親を探しに行つたのか、近くには見当たらない。何としても昨夜の表参道が気になった。あの火の嵐の中では多数の一般の人たちを掌握できず、一部の人たちのみで火勢の弱いと思われた青山方面に駆け戻った事が!!再度表参道に戻った時ビックリ。

まず目に止まったのは十字路の真中にリヤカーに乗せられてここまで家族とともに逃げて来たのであろう。しかし、家族の人も生か死か、もはや進退きわまり、やむなく離ればなれになつたのでしょう。この一人の男性はリヤカーの上で明治神宮方面に手を合せた格好で、生黒く蒸し焼きになつていた。そして左側のコンクリート建物に沿つたところには、逃げおくれた人たちがここは安全と思つて集まつたのか、五、六体なのかあるいは十数体なのかは判別しにくかつたが、幾重にも重ねてある死体を見た。

今回も私の成仏を祈りつつ表参道に立つた私には、生涯忘れることの出来ない恐怖の一夜の場所になつてしまった。

原爆の広島三年間

●久我山二丁目

石川 隆次

(大正一〇年生まれ)

太平洋戦争は、発後の昭和一七年一〇月、現役兵として広島師団輜重兵第五連隊に入隊し、更に久留米の第二陸軍予備士官学校で鍛えられ、将校勤務の見習士官として原隊に帰って来たのが同一八年の末だった。三〇名の同僚のうち、私を含めて四名が原隊に残り、他は逐次戦地へ出て行った。以後副教官、任官しての教官と歴任し訓練の終えた初年兵や召集兵を次々と戦地へ送り出していた。

その間戦火は厳しく内地各地に爆撃が加えられ始めたころ本土決戦に備えて各地に地下要塞陣地等の構築が始まり私も九州宮崎、鹿児島方面で半年ほど従事した。当時広島も時々空襲に見舞われたが、爆弾等の投下は受けなかった。

九州から帰広した同二〇年三月、工兵の将校の極度の不足から転科する事になった。新しい兵科の勉強と実地に並大抵の苦労ではなかったが一月ほどで何とか身に付け、新教官として任務を遂行して行った。

敵の内地陸が叫ばれる中で、海岸の要撃水際陣地構築の必要に迫られ、鳥取の皆生の浜にその見本を造ったり、広島

市内の五〇メートル道路や広い空地(避難所)を造るための家屋疎開計画による家屋倒壊作業には、大工の職を持った者が大勢いる工兵が最適で、毎日駆り出された。

このころは次々と召集兵が入隊してきては編成が終り次第戦地に出発して行く日が特に激しくなっており、その部隊の乗った輸送船団が海上で撃沈された報も入って、何とも言えない気分になった事も度々だった。

工兵で初めての初年兵の検閲を完了したころの七月二六日より中隊長集合教育のため千葉県松戸の陸軍工兵学校に派遣された。入校期間の半分を過ぎた八月六日あの忌わしい原爆の洗礼を受けた広島、ニュースは直ぐ入って来て、翌七日学校側から帰隊を命ぜられ運よく広島止りで運行していた列車にて八日到着。数少ない乗客とともにホームに降り立ってギョツとした。ホームの上家は鉄骨のみが残がいをさらし、向こうには四キロメートルも離れた宇品が丸見えではないか。ぐると見廻しても一望千里焼野ヶ原の市街があるのみ。ほんとは悲惨な広島市の姿だった。

道すがら死んだ人や負傷者、命からがらの人、避難する人等軍民を問わずすごい様相を呈しているのを目の当たりにしながら自分の部隊にたどりついた。全滅かなと思っていた部隊は私の所属する中隊他が倒壊しただけで大部分が残り、また南側の民家の一部とともに焼失は免れていたが、倒壊による圧死者、被爆死者は負傷者共々多数にのぼっていた。中隊の残留の将校以下戸外にやけどの傷も生々しく何の気力も無くして座ってる姿に接し「さあ皆んな元気な石川が戻って来たぞ！ 何でもやってやるぞ」と彼等を励ましながら被爆の現況を詳しく聞き出しました。その中で、六日当日に下士官ばかりの集団で召集入隊した者たちが相当やられたとかで、特に不びんの念にかられた。

予測していたものの、相生橋近くの下宿は跡片もなく焼失し貸主のおばさんの生死も不明、調査のすべもなかった。翌日から死亡者の処理（火葬）にはそばの河原で山から取って来させた枯木（ほとんどなかった）や生木を井桁に組んで死体をのせ焼くのだが、簡単には処理出来ず苦勞した。負傷者の手当といっても唯一のしかも数少しかアカチンを塗ってやるだけで、見る目にもかわいそうだった。

ところで私は帰隊したものの、八月四日付で編成完結し三條本町の国民学校に居所を移していた独立工兵第一六大隊の副官として発令されている事を知らされ、司令部と相談の上、一二日迄残務処理引継を終了し、新部隊に合流した。この隊は爆心地から三キロメートル離れていたので、直接大きな被

害はなかった。

この大隊は東京防衛司令官の隷下にあつて東京品川方面の防衛警備に当たる任務で、命令到着次第任地に出動出来るよう広島駅に食糧を含む軍需品を集積野積にして（シート掛け）歩哨をつけて待機していたのである。被爆後連絡は中国軍管区司令部の参謀と取る事になっており、以後毎朝徒歩又は自転車で司令部に通った。

任務とはいえ、毎日の行き帰りに死体や今にも死にそうな負傷者等々家も焼かれ身内とも別れ何とか生きようとする人たちの生きざまを目のあたりにして、自分の仕事を達成するのに一生懸命で彼等の片腕にもなつてやれないもどかしさを感じ、何ともつらかつた。当時司令部はもとより周囲の歩兵、砲兵、輜重、通信、騎兵等の部隊も全滅状態で、参謀も旧熊本師団からの応援で広島島の地理等不案内のため広島在住古参の私が司令部の仕事を午前中手伝うはめになって八月が過ぎるのである。途中一五日の終戦の陛下の放送はあったものそれで任務が急に終わるわけではなく、広島島の司令部は重傷の参謀長の病床からの秩序整然の復員を願った指令のもと行動することとなる。

被爆のため中尉任官の報を受けたのも八月二〇日ごろだった。八月後半部隊は市内の道路確保のための復旧作業、更に九月一日より爆撃被害の大きかった岩国駅の復旧作業に従事した。その間管轄の異なる部隊を理由に許可を得、他の部隊より少し早かったが、七日復員下令を受け、当日徹夜で復員

並びに乗車証明書を作成し、翌八日給与他支払いとともにこれを渡し、大半の兵と下士官を復員させた。残余の全将校と一部の下士官兵は一旦帰広し、九月一四、五日の最終復員完結となった。その折指令によりイロハ名簿他必要書類一切焼却したので、後日参考にするものは何もない。

復員後約一か月間は被爆の疲れからか病床にあったが、何とか社会復帰を果たし、あの悲惨な被爆地体験から軍隊の事は一刻も早く忘れ去ろうと努力したが、行動した事や目にしたものは何一つ脳裏から離れず、ただ人の名前は特別の上官以外ほとんど思い出すことなく四五年が過ぎた。ところが被爆手帳の交付の必要に迫られ、手続中に四五年振りに出逢った同部隊の人から二、三名の名前を知らされた途端、記憶がよび戻せたように一瞬に十数名の名前が浮び、全ききつねにつままれたようだった。

戦後ずっと元気だった私も被爆三五年後に白血病による胃ガン、四五年後から高血圧症他各種の病による体調不良に悩まされながら生きている人生である。

一瞬にして死の灰と化し、放射能の影響が三〇年、四〇年、五〇年後になっても身体に出て来るような恐ろしいむごい核戦争は、いかなる世界でも起こしてはならないと叫びたい。

